



Daily Life at FUZOKU とは

この記事は金沢大学附属高校の生徒の学校生活や学校行事、執行部の活動について記載していくものです。この記事を通して附属高校の楽しさや魅力に気づいていただけると幸いです。

●○特別授業「『災間を生きる』あなた方へ」○●

2年生は、英語の時間で3時間に渡って自然災害について学んできました。その後、9月4日（金）に本校の校長先生による特別授業「『災間を生きる』あなた方へ」が行われました。

校長先生は、東日本大震災発生当時は教育委員会の職員として、震災後は石巻西高等学校の教頭として働き、震災の被害にあった生徒を多く見てきました。その経験を受けた貴重なお話を50分に渡って聞くことが出来ました。ここでは、後日聞いた先生の思いについて紹介します。

●○番号の残酷さ○●

震災後、先生が赴任された石巻西高等学校の敷地内には、仮安置所としてたくさんの方のご遺体が運ばれてきました。それぞれに番号が振られ、日に日にその番号は大きくなっていき、1週間で544人のご遺体が運ばれました。そんな中では、「○番の人運び出して」とまるで物のような扱いをされる光景もあったそうです。これが学校の中で行われていいのかと辛く感じたそうです。

その数日後に高校の合格発表がありました。その時先生は、同じ番号でもこれほど意味合いが変わるのかと感じたそうです。仮安置所の番号はご遺族の方にとって悲しく心苦しい番号なのに対し、合格発表の番号は受験者やその家族にとって待たれている番号です。これほど相対する意味合いを持つ番号が同じ学校の敷地内にあることに先生は番号の残酷さを感じたと言います。

ご遺体受付日と ご遺体番号	
(ご遺体の搬送された日に日付と遺体番号)	
受付日	ご遺体番号
3月11日	1
3月12日	2～72
3月13日	73～211
3月14日	212～329
3月15日	330～381
3月16日	382～415
3月17日	416～544



●○高校生の取り組み○●

復興に際し、生徒の心中には複雑な思いがあったようです。震災の傷が癒えてない人や、仮設住宅にいる人が多い中、自分たちは笑顔でいていいのかという考えがありました。しかし、このままでは暗い街になってしまうという考えや、支援の恩返しとして1番なのは笑顔で、元気な姿を見せることだという考えから高校生は高校生自身や、その周りも笑顔になり、勇気を得られるような取り組みを行いました。

部活動対抗駅伝では高校生がそれぞれの思いのもとで自由に楽しみました。それを見た周りの人にも笑顔が浮かび、地域の人々を巻き込んで街が笑顔でいることを伝えることに成功しました。

「青い鯉のぼりプロジェクト」は一人の男子生徒が始めた取り組みです。彼の弟は震災の被害に遭い亡くなってしまいました。それを受け彼は、弟の生きた証を残そうと、弟がなくなった際に手にしていた青い鯉のぼりを全国から集めました。その輪は日本全国、世界へと広がり「震災を忘れない」の象徴と移り変わっていきました。たくさんの人たちが応援してくれていることを忘れない、世界中の人にも自分たちの存在を忘れないで欲しい、という2つの意味合いが込められています。1人の高校生の力で多くの人を動かし、思いがけないところからも支援が集まったことに先生は感銘を受けたということです。



●○校長先生の中の変化○●

後日のインタビューで先生は、震災の経験で仕事観が大きく変わったと答えてくださいました。これまでは「先生が枠を作り、生徒は其中で活動をする」というのが当たり前だと思っていたけれど、先の生徒の取り組みを受け、枠を作るのではなく、自由な発想を発信していくことも大切ではないかと感じたそうです。また、「青い鯉のぼりプロジェクト」のように世界をも動かす力を持っている高校生たちを教育できる教師はとても大切な仕事なのかもしれないと、教師のあり方についても深く考えさせられたと先生は話してくださいました。



●○生徒へ伝えたかったこと○●

後日のインタビューで校長先生は特別授業を通して附属高校生に伝えたかった3つの思いについて話してくださいました。

1つ目は生徒の取り組みについてです。震災時には高校生が主体となって復興に向けて「青い鯉のぼりプロジェクト」など様々な行動を起こしました。彼らのように、附属生だからこそリーダーとなってほしい、行動を起こしてほしいという思いがあったと話してくださいました。

2つ目は自分が震災時に抱いた思いを世界に発信してほしいということです。震災の残酷さや、当時の辛さを世界に発信することで震災間の人々の思いや経験を風化させたくないという思いを感じています。

3つ目は附属生の将来についてです。もし災害が発生した時、自分の震災の経験や、そこにある多くの人の思いを思い出して自分の行動に活かしてほしいと話してくださいました。



●○特別授業を受けた生徒の感想○●

いろいろな災害のニュースを見るたび、胸が締めつけられる思いがした。正直、今もどんな災害が来るのかなんてわからない。どんな準備をできるかなんてわからない。学校で防災教育を受けても特に何もしてこなかった。でも、変えられるとしたら私だと思う。家族の命を守れるのは私だと思う。校長先生の話聞いて感傷的になっただけだと笑われるかもしれない。でも、私にできることを最大限やりたと思った。ニュースを見て悲しくなるだけでは命は守れないし、先延ばしにしているようではだめだと思う。ほかでもない私が、考えなければならなかった。こういう機会を、今、高校生の時期に与えてくださったことに感謝しています。ありがとうございます。

やはり生き永らえないことには何も始まらない。まずは自分のために行動をした後は、心の中でスイッチを切り換え、今度は人と手を取り合いながら生きようとするのが高校生にできることであり、必要なことであると思う。

釜石の奇跡の話は、「いのちてんでんこ」については知っていましたが、中学生が小学生の手を引いて逃げたことは知りませんでした。やっぱり、想定外のことが色々起こる災害時に咄嗟にできるのは体に染み付いた行動なので、日頃の防災訓練というのは一番大切なのだなと思いました。避難するときは最善を尽くせ、というのも印象に残りました。周りの人がまだ動いていないから大丈夫、避難は大袈裟だ、とかは災害に無頓着な人でなくても思ってしまうそうです。日頃からもしもの時を想定して色々な情報を知っておくことも生き残るために大切です。私はこの授業を受けた後、できることを考え、とりあえず避難所になっている学校に行ってみたり、家の中の防災袋と防災頭巾を玄関に移動させたり、自分の部屋の家具を固定してみました。今回の授業で確実に防災意識は高まったと思います。「風化はするが、無関心であってはいけない」という校長先生の言葉を常に心に留めておきたいです。

毎年3/11に好きなアーティストが震災のことをかいた歌を出してくれます。そのとき私は必ず黙とうし、被災された方、今は天国で生きておられる方に祈りをしてきました。というか、してきたつもりでした。でも今日初めて泣いたような気がします。しかし、校長先生のお話を聞いて、泣いちゃいけないような気がしました。そのとき思ったのです。「自分は何をしていたのだろう」「自分に何ができるのか」と。自分が今改めて震災の記録をはっきりと知れたことに感謝して、自分なりに3/11には身の周りにだけでもこの記録を忘れぬように伝えます。何か出向いて行動を起こすことは難しいかもしれませんが、ここからでもできることを全国の高校生が探すべきだと思います。

生徒会公式Twitterではホームページの更新情報を発信しています！

是非フォローお願いします！

生徒会公式Twitter https://twitter.com/kfshs_scouncil

